

ワタルと姉の「理由」をめぐる夏休み

第二話

ぐるぐると頭の中をかき回されているような感覚をぐっとこらえて、おれは姉ちゃんに言った。

「だって、読書感想文にはその本をいいと思った理由を書きなさいって、夏休みに入る前にヤマウケ先生が言ってたんだもん」

「あんな不勉強な人のいうことなんか、あてにしちゃだめよ」

コバエでも払う<sup>はら</sup>ように、姉ちゃんはおれの言い分をはねつけた。姉ちゃんはたまにさらっとひどいことを言う。

あの先生は、よくおれに姉ちゃんの話をつてくる。国語の成績がバツグンだった姉ちゃんのことを自慢<sup>じまん</sup>の教え子だと思ってるらしい。それなのに、当の本人からそんなことを言われてるなんて、なんだか救わ

れないよな。まあでも、おれだってあの先生に大した思い入れはないし、別にどうでもいいんだけど。

「私たちのときにもそうだった。あの先生、生徒にとりあえず理由を書かせればいいと思ってるのよね」  
とげのある言い方で姉ちゃんはつづける。

「なんでもかんでも理由を言葉にさせることがすなわち論理的思考のトレーニングになると思っちゃってるの。でも、この世には理由を言葉にするのがきわめて難しい場合、あるいは理由をというものがそもそも存在しない場合がある。それに気付けていない時点で、あの先生自身がまず論理的じゃない。思考停止してる。——まあ、もちろん論理的であるとはどういうことかということのも大きな問題ではあるけれど。私のこの批判の姿勢しせいだって、完璧かんぺきに論理的なものかは分からないし」

ロンリテキ：おれの苦手な言葉が出てきた。最近よく聞くけれど、一体どういうことなのかぜんぜんピンとこない。ここはできどうに質問して話を別の方にむかせるか。

「理由をつけるのが難しいとかそもそも存在しない場合って、たとえばどういうの？」

「そうね、たとえば、料理を食べておいしいと感ずることとか」

この答えは意外だった。だって、かんとんに反対意見が思いついたから。やぶれかぶれのハッターリじゃない、

しょうしんしょうめい  
正真正銘の反論。

「それなら『うでのいいシェフが作ったから』とか、『高級な食材を使ったから』とか、いろいろ理由をつけられんじゃん？」

「うーん、ちょっとちがうんだなあ。」

思いついた反論をおれが言うのと、めずらしく姉ちゃんがニヤけながらそう言った。でも、その笑いは、おれをバカにするような笑いじゃない。なんか、いい笑顔。楽しそう。さっきまであんなにとげとげしいことを言ってたのに、そのとげはすっかりひっこんだみたいだ。

姉ちゃんはほんの少し目を空中にさまよわせて考えたあと、こう言った。

『うでのいいシェフが作ったからおいしい』と言うときって、それは『うでのよくない素人がつくったからおいしくない』のような、他の何かと比べてそう言ってるよね。でもね、私が言いたいのは、何かと何かを比べてどちらがおいしいかを判定するときの『おいしい』じゃない。あるものを食べて『おいしい』と感じる、その端的たんてきな感じそのものについて言ってるのよ。端的な感じそのものには理由を見つけようがないってこと

タンテキとかいうなぞの言葉が出てきたし、この話のたぶん二%くらいしか理解できなかったんだけど、

おれは姉ちゃんの目をしっかり見てうなづくことにした。だって、姉ちゃんの言葉に強い活力みたいなものを感じたから。この勢いを邪魔じゃましちゃいけないなって思ったんだ。

「仮に、本当にうでのいいシェフの作ってくれた料理を食べたとする。それで私はとてもおいしいと思った。そのとき、そのシェフ本人から『どうしてあなたはいまおいしいと感じているのですか』ってたずねられたら、私はなんて答えたらいいか全くわからないわ。おいしいものはおいしい。それ以外になんとさえいのかわからない。その『どうして』に与えられる言葉が存在しないの」

そこまで言うと、姉ちゃんは少しうつむくように視線を下ろした。なんとなくだけど、いまの言葉のさじこの方は、悲しんでるような口調に聞こえた。シェフの「どうして」に答えることができないことに対しての悲しみか、それとも、そんな答えられない質問をしてくるシェフに対しての悲しみか。あるいはその両方なのかもしれない。

なんていうか、悲しいシーンのときの女優さんを見ているみたいなきもちになったんだよな。これはもちろん、姉ちゃんの言い方がニセモノっぽかったっていうことじゃない。姉ちゃん自身がほんとに悲しいことをかかえてるはずなのに、悲しみがたしかにそこに映されていたんだっていうこと。

それでおれはなんだかうっとりしちゃって、「それなら『あなたが作ってくれたからですよ』って答えてみるのはいかがかな」って提案するのを思いついた。でも、すぐにそれはちがうと思いついた。だって、こんな言葉はちょっと甘い愛の告白めいていて、シエフをとまどわせてしまえばいい。さうだ。さうだ。さうだ。このときシエフが聞きたいのは、きっとそんな言葉じゃないんだ。

それに、姉ちゃんが言うべき言葉でもない。なぜなら――

「好きとか嫌いっていう感情も、きっとさうだと思おう」

姉ちゃんはさう言うのと、「ちょっと冷えずぎね」と言ってエアコンを切り、リビングの窓を開けた。気付けばもう日がだいぶ低くなっていた。

「さう、って？」

「理由。つけようがないのよ、好き嫌いには。私はさう思う」

窓の向こうのうすオレンジ色の空を見つめたまま姉ちゃんは言った。レースのカーテンの編目が、姉ちゃんのTシャツにあわい影かげを落としている。

「私はジュンが好き。でも、じゃあどうして好きなのかとたずねられても、私には答えようがない。『わか

らない』としか言えない。でも、この『わからない』は質問の意味に対する『わからない』。好きかどうか『わからない』のではない。理由がなくても好きという気持ちはかわらないし、むしろ好きという気持ちは理由なんてものとは無関係に存在するの」

となりの家の風鈴ふうりんの音が窓から入ってきて、おれのまつ毛をさわった。そう、ジユンくんっていうのは姉ちゃんのカレシ。姉ちゃんからの甘い言葉が贈おくられるべき、本当の相手だ。

「もし、好きという気持ちに無理やり理由をつけたら、きっとこの思いはとてつまらないものになってしまふと思ふ」

そう言うと、姉ちゃんはおれの方をむいた。

「ワタルは、ユウジくんのこと好きだよね？」

ユウジというのはおれの同級生だ。保育園のときからの友達。

「もちろん、親友だからね」

そう答えてすぐ、おれはハツとしたんだ。親友だから好きだって？ おれはなんてバカなことを言ってしまったんだ。「好きという気もちに理由をつけたら、その気持ちはつまらないものになってしまう」。まっさき

の姉ちゃん言葉がやまびこみたいにおれの頭の中でくりかえされた。

そのときの「しまった！」っていう気持ちはきつとおれの顔にはっきり出てしまっていたんだと思う。だって、姉ちゃんがおれを見て、ニコツとしたから。

だけど、その笑顔はやっぱりおれをバカにしているようなやつじゃなかったんだ。

夕方の風がカーテンをゆったりとめくった。おれのシャツの中にもふきこんできて、わきがちよとくすぐすだった。

(つづく)